



山口の国宝「瑠璃光寺五重塔」と「東京スカイツリー」

写真と文：網野ゆかり

室町時代約200年におよび、山口を拠点に栄華を誇った西国一の大名・大内氏。その栄華の象徴が国宝「瑠璃光寺五重塔」です。その塔は、ある歴史を秘め、また、その立ち姿は「東京スカイツリー」にも影響を与えています。どういう歴史を秘めた塔なのか、ご紹介します。

大内氏の栄華は、大内弘世が14世紀半ば、周防国・長門国（現在の山口県）を手中におさめ、両国の守護に任じられたことに始まります。大内弘世は石見国（島根県西部）の守護にも任じられ、安芸国（広島県西部）の東西条も領有します。

■明徳の乱鎮圧と南北朝和睦に貢献した大内義弘

やがて義弘に大きな転機が訪れます。3代将軍足利義満が諸国遊覧で周防国へ下向し、その帰国に伴い、大内義弘は上洛し、京都に留まって将軍を補佐することになったのです。そうした中で大内義弘の名を高める2つの出来事があります。一つは山名氏清の「明徳の乱」での功績です。山名氏清は、一族で当時全国の6分の1に当たる11カ国の守護を務め「六分の一殿」という異名を持つ有力守護大名でした。将軍義満は、その力をそぐため計略をめぐらし、山名氏清が謀反を起こすよう仕向けます。そして1391（明徳2）年、山名氏清らは挙兵。その一番勢として京都二条大宮に侵入した氏清の弟に挑み、活躍したのが幕府方の大内義弘でした。明徳の乱は将軍義満方の勝利で終結します。そして旧山名氏の分国が諸大名に配分され、中でも最も躍進したのが和泉（大阪府南部）・紀伊（和歌山県全部）と三重県（一部）の守護職を獲得した大内義弘でした。大内義弘はもう一つ、大きな功績をあげ

ます。1392（明徳3）年、南北朝・南朝の和睦を斡旋し、南北朝合体に寄与したのです。数々の忠節を賞され、大内義弘は将軍義満から一族に准ぜられるまでにあります。

■傲慢な権力者将軍義満に果敢に立ち向かった義弘

ところが、蜜月は急転します。将軍を辞任し、出家した義満は権力の絶対化を目指し、大内義弘に服従を強いるようになったのです。大内氏は朝鮮との交易の美権を握っており、そのことも義満には不愉快だったと思われまます。やがて少弐氏討伐で九州に下ついていた大内義弘は、義満からの上洛命令を拒否し、謀反を決意します。義満の使者となった高僧に義弘が語ったことによれば、謀反の決意には、次のような理由がありました。まず一つは、義満から少弐氏討伐の命令を受けて戦ったが、その裏で義満は少弐氏に義弘を退治するよう、ひそかに命じていたこと。和泉・紀伊は子々孫々まで相伝できると信じていたが、近く没収されるとの噂があること。さらに今回の上洛命令は京都で自分を誅殺するのが目的という噂があること。それらの理由から大内義弘は謀反を決意した、ということです。また、義弘は義満について「弱きをくじき、強きを助けるやり方」だといったことを今川了俊に告げ、その傲慢さを批判していたといえます。

■堺に残る義弘の供養塔

大内義弘は堺に籠城し、その義弘を攻めるべく義満は幕府軍を派遣し、1399



元々は香積寺五重塔として建立された国宝「瑠璃光寺五重塔」。江戸時代、五重塔は藪へ移されることになりましたが、山口の人々が嘆願書を出し、残ることになったといえます。



内陣は普段、扉が閉じられていて拝見できませんが、例年3月初旬から4月初旬までの「山口お宝展」で特別公開され、五重塔の構造を知ることができます。仏像の後ろに見えるのが心柱。

東京スカイツリーと五重塔 2012（平成24）年開業の「東京スカイツリー」。それは五重塔のように魅力ある立ち姿を造ろうといったことがデザインコンセプトの一つでした。そのデザイン監修者、彫刻家で元東京芸術大学学長の澄川喜一さんは「江戸時代以前に建立された全国に22ある五重塔の中で山口の五重塔が一番美しい」「東京スカイツリーの出発点は、岩国の錦帯橋や山口の五重塔でもある」と語っておられます。

山口の五重塔は上の層になるにつれ、層の幅が細くなり、それがすらりとした美しい立ち姿を形作っています。軒は緩やかに反り、屋根は伸びやかな美しさを表現できる松皮葺。計算された美しさです。五重塔は心柱が最上層の大屋根を支える垂木と組み合うまで、中間層の構造材に全く触れない構造で、それが柔軟性のある制震構造になっています。日本の伝統技術や美に敬意を払いつつ、最先端技術や多くの人々の経験・知恵が結集された東京スカイツリー。その原点の一つが、室町時代最大の権力者に果敢に挑み、当時の最先端の文化を吸収し、多くの人々の心をも掴んだ大内氏の象徴、山口の五重塔だったのです。



参考文献…
おいでよ堺21実行委員会 『堺観光情報ファイル』2007
坂井英治 『日本の歴史』室町人の精神 2009
山口県編 『山口史通史編 中世』2012
米原正義 『戦国武士と文化の研究』1976年など



大阪府堺市堺区西湊町本行寺にある「大内義弘供養塔」。紀州街道の1本東側の筋にあります



歴代仕職の墓に隣り合って大内義弘の墓があります



将軍の「影の直轄軍」盛見 大内義弘の敗死後、義満は降伏した弟の大内弘茂に家督を継がせようとした。しかし義弘のもう一人の弟・盛見は抵抗し、兄弟間で戦となります。その結果、義満の追討命令をはねのけ、盛見が実力で周防・長門を獲得。その後、幕府と和解し、豊前の守護職も回復させます。義満が亡くなると、大内盛見は幕府から求められて上洛します。そして4代将軍義持の政権を支える「影の直轄軍」となるなどして、京都で15年にわたって活躍していきます。

9（応永6）年11月29日、ついに「応永の乱」が始まります。大内義弘方には、鎌倉公方も味方に付き、延暦寺、興福寺も関与します。美濃国、丹波国、近江国でも騒乱が起き、応永の乱は大規模なものに発展します。しかし12月21日、大内義弘は無念にも戦死します。このとき、義弘は堺の竹藪に逃げ込んで自刃した、といわれ、堺の人々は義弘を悼み、遺体をその場に葬りました。しかし、幕府をはばかりて墓は建てず、代わりにクスノキ3株を植えたといえます。

兄義弘を弔う山口の五重塔 大内盛見は、山口で五重塔の建立に着手します。場所は、かつて兄の義弘が山口に創建した香積寺の境内。五重塔は、無念の死を遂げた兄の義弘を供養するための建立でした。ところが1431（永享3）年、京都にある噂が飛び込んできます。「盛見が筑前で50騎をつれて猿楽（能）を見物中、敵方500騎に取り巻かれ、合戦に及ばずして切腹した」というのです。将軍義弘は「言語道断次第天下安危此事」と驚愕し、皇族の貞成親王も衝撃を日記に記します。まもなく噂は事実と異なることが分かったものの、盛見の死は事実でした。

五重塔の完成は1442（嘉吉2）年以降のこと。盛見は、長い在京で培った教養や美意識を傾けて兄の供養のために造った五重塔を、その完成を見ることなく亡くなったのです。

大内盛見は教養も豊かで仏教にあつく帰依していました。当時の中央政界は五山文学の全盛期で、禅僧と上級武家とが交遊する集いの中で、その有力な一人が大内盛見でした。盛見の邸宅には、将軍も度々訪問するなど、盛見は中央政